
悲しい

muffin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しい

【Nコード】

N7340C

【作者名】

m u f f i n

【あらすじ】

悔恨とも憎悪ともつかない残滓が流れ始めるとき。短い話です。

私が箱庭に椅子やらテーブルやら並べていると、雛子がいつも破壊していく。雛子はもう何でも口に入れるような年ではなくなつたので、おろおろとそんな心配をする必要もなく、私は彼女が好き放題しているのをただ見つめている。

雛子は椅子を蹴り飛ばし、テーブルを叩き壊し、開かない窓にかかったカーテンを引きずりおろす。

私はそれを見ながら、苦い思いに浸る。べつにどうってことない。痛くない過去だけ持っている人なんているのだろうか？

私の胸に渦巻く苦い思いに気づくはずもなく、雛子は破壊し続ける。

「雛子、テーブル壊しちゃったらご飯どこで食べるの？」と私が聞くと、雛子は私の胸元に抱きついて「ここ」と笑いながら言った。

冬の寒さと春の暖かさが変わりばんこに訪れ、天気予報が混乱しては、それを自ら笑い話にするような季節の変わり目のある日のことだった。

朝から家事に忙しく、洗濯物を干してようやく一息ついた。まだ冷たい空気に差し込む暖かい日差しと、春の強い風になびいて、夕方には洗濯物はすっかり乾くだろう。

部屋へ戻りドアを開けると、雛子は既に部屋の中に居た。ニコニコ笑っている。

私は傍らの箱庭を見て目を疑った。

私の箱庭はいつも同じだ。それはいつか見たことのある家であり、何度別の置き方をしても、いつも同じになってしまった。

なのに、今は見たことのないレイアウトになっている。

私は待った。いつもの苦い思いを。もう何年もそうであったように。何をしても、かわらなかったように。

いつもそうだった。結局は理由のわからない苦い思いが、すべてを無に帰してしまう。だから私は何もしなくなった。私の箱庭は、何もしない私の何もしなくても必要な居場所だった。

私は待った。

雛子が私をじっと見上げている。

あの苦い思いが、もうわきあがってこない。止まっていた取り返しのつかない時間が私の中を流れ始めた。そのあとに悲しみが残った。了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7340c/>

悲しい

2011年1月25日15時43分発行